

「花送り」

2010/10/25

戸を開いて真っ先に、目に飛び込んできたのは鮮やかな一色。

次いでそれを差し出す人の顔。

「はい！」

迷いなく疑いのない、明るく抜けるような声。

あまりに屈託がなく、吐き出しかけた皮肉は行き場を失った。

「なんで？ イヤか？」

「嫌いではないですけど……」

言葉が出てこない代わりに息を吐き出したら、ずいぶんと深いため息になった。

わざとらしいかとも思ったが、太子の表情を伺っても変化はなくて余計に脱力した。

げんなりと、妹子は自室を振り返る。

その視線の先、棚の上には花瓶が飾られていた。そこにはこんもりと、溢れんばかりに花が生けられている。

と、いうよりも、盛られているといった様子で花瓶はすでに花でいっぱいだった。

妹子は太子に向き直って、きっぱりと言ってみせる。

「こう、毎日続くともう場所がありません」

「じゃあ明日は新しい壺をやるうか」

「そういう問題じゃなくって」

言外に迷惑だ、の意志をにおわせようとしても無駄だった。何と言えは伝わるか、悩む妹子の前で太子は屈託なく笑う。歯を見せるやり方でも朗らかに。

「ま、これ、今日の分。せっかくだから受け取れよ」

「……………はあ」

「はあ……………いい加減にしてくださいよ」

差し出されたものを拒むことは、妹子にはできなかった。太子が携えていたのは薄い大きな花弁の赤い花ひとつ。太めの茎は柔らかい緑色で、細かい産毛で覆われている。手に取ると意外に強い産毛が指先を優しく刺した。妹子が花を受け取ると、太子は妹子の隣を抜けて、迷いなく部屋に入ってしまう。

「邪魔するぞー」
「お断りですよ」

言ってみるものの効果はないことはわかりきっていた。花は入場券でも何でもないんだぞ。内心でぼやいても口に出さなければ太子には通じない。何となくくるくると、手首を回して色を揺らした。

妹子は部屋の真ん中で寝転がる太子を見て、また深々とため息を吐いた。

以前は花を束にして寄越してきたのだが、困ると、妹子がはつきり言ったらあの時は、太子は素直に頷いてくれた。わかってくれたのだとほっとしていたら、翌日から差し出される花は一輪になった。

わかって、くれたのだと思いたい。本当は花を持ってくること自体止めてほしかったのだが、これが純粹な太子の親切だとわかっているからそれ以上は言いづらかった。以前仕事に関わるものしかない妹子の部屋を見て太子は寂しい部屋だと評して、自分自身でもそう感じていた妹子は言ったのだった。そうですね、花でもあれば違うんでしょうか、と。それからなのだった。太子が、妹子の部屋に花を持ってくるようになったのは。

しかもたまにはなくて律儀なことに毎日毎日。飽きっぽい太子のことだからどうせ長続きしないだろうと、それならばもらえるうちにもらえるだけ楽しんでおこうと思つたのが間違いだったと妹子は今では思っている。

太子の花の贈り物は途絶えることなく毎日続き、今では花瓶の許容を優に越している。花瓶は安い買い物ではないからそうそう増やすことはできない。でも明日は、きっと花瓶ごと花を贈られるのだと何となくわかってしまった。ため息が出た。

今日だつてわりと意を決して言ってみたのに効果は今一つのようにだし、妹子は何となく頭を抱えなくなる。

本当は花を迷惑と感じたくないのだが、毎日続くと置き場所に困る。

それよりも何よりも、どうして太子がここまでこの部屋に執着するのかと、釈然としない気持ちで妹子は持て余していた。

「言っておきますけど、相手もしないし何も出さなさいですからね」

「別に、いいよ」

珍しく聞き分け良く太子が返事をして、でも結局妹子は紙と筆と墨を奪われた。それきり、太子は畳の上に腹ばいになって熱心に何かを書き付けている。

少しだけ気になって妹子が後ろからのぞき込んだらただの落書きだったけれども、その無意味さに落胆しつつ静かなのはいいことだと思ひ直すことにした。

おかげで太子がいるにも関わらず仕事は滞りなく進み、気付けばずいぶん集中していたようでふと外に目をやると、窓の外の影はずいぶん短くなっていた。日は高いところにあるようで部屋の中からは見えない。

知らずにこわばっていた背筋や肩をほぐそうと、うん、と思ひ切り腕を伸ばして背伸びをして、ついでに腰をひねった。なんんだかすごい音がした。

そんな姿勢で後ろを振り返ってようやく妹子は、じつとこちらを見ていた太子に気が付いた。

太子は腹ばいで床に転がったまま、体の向きだけは妹子の

方に変えて、両肘を支えにして手のひらにあごをのせながら、はたはたとゆるく足を動かしていた。

太子としつかり目があつて、妹子は腰をひねった姿勢のまま固まつてしまった。

「……………何か？」

「何も？」

妹子を真似るような抑揚で答えた太子は、楽しみに足を動かしている。妹子にはその理由がわからなくて困惑するしかない。

相手もしない、何もしない、いつもならそろそろ、構ってくれとばかりに攻撃される頃合いだった。

それなのに太子は機嫌が良さそうに、うれしそうに目を細めて笑っている。

妹子には理由がわからない。

そのまま無視できたら良かったのに、困った表情で妹子は太子を見つめてしまった。

そのうちにふと、太子が息を吐いた。

ため息のような、わずかに苛立ちを含んだような気配に、思わず妹子は緊張した。

「鈍イモめ。気付くものだよ？ ふつうはな」

「何、に、ですか」

「だから鈍いって言ってるの」

太子は身体を起こして正座した。らしくないその姿勢に何となく、つられて妹子も姿勢を正す。

太子なんかと真剣に、膝つきあわせて何やってんだ。早く仕事に戻れと、頭の中の誰かは言っていたのに身体は動かない。

ぎゅつと、伸びてきた手に手を捕まれてしまえばなおさらだった。

ただじわじわと脳内で鳴り出す危険信号。警戒音。何かが変わだ、おかしい、それ以上聞くなと忠告する声。

そもそもおかしいことだらけだった。毎日の花の贈り物、その律儀さも。聞き分けの良さも大人しさも。いつもの太子を思えば何もかもが。

すつかりと太子のペースに飲まれてしまった妹子には気付けない。

だからだ。妹子は、太子が腰を浮かせて身を乗り出してきたも、その顔がぐいぐい近づいてきていつもなら近いうざい臭いどけると真つ先に手が出ているような状況でも、何もできなかつた。

手首を掴まれている。それを強く意識して、手のひらを握り込んだ。

ただぶつかりそうだと思って、何も考えられずに目をつむってしまった。

さつと。

かすめるように唇を塞いでいった感触と、最後に一度、ちろりと舐めて離れていったものと。

「……………つ！！」

何をどうしたものか、気が付いたら妹子は背中に衝撃を感じて、ばらばらと卓の上のものが散らばった。いつの間にもうやってそこまでにじり下がったのか、自分の行動がぼつかり記憶から抜け落ちている。それなのに、近すぎた顔も唇の感触も鮮明で妹子は頭を抱えたい。卓に背中を預けて、力が入らないままずると、崩れ落ちそうな身体を何とか後ろ手で支えている。

太子は変わらない位置に正座して、嘘みたいに静かに微笑んでいた。

まるで偽者みたいだと妹子は思う。僕の知っている聖徳太子という人間は、こんな表情をしない。間違っても、僕相手にこんな顔を見せたことは一度もない。

……………一度も？

何か引つかかったまま、ぐるぐると混乱する思考にすべて巻き込まれていきたちまち形を失くしていく。

「お前ももっと賢くて、だから本当は、わざと気づかないふりしてんのかとも思ってたけど」

太子が何かを言っていた。妹子はただ黙って、それを聞いていた。

何かを思い出しそうで、思い出せそうで、それでもいたずらに混乱した頭の中ではすべての物事が指先をかすめた瞬間に遠ざかっていく。

無意識に唇を手の甲で押さえていた。気付いて顔が熱くなる。顔だけじゃない、体中が熱い。その熱に煽られるように思考は加速してとりとめもなく巡っていく。

太子が淡々と言葉を繋いでいく。

それ以上を言ってほしくないと思ったのに、制止することもできなかった。

ただ、馬鹿みたいに呆けたまま、聞いていることしかできなかった。

「私ともう、我慢できなくなっちゃったから、言うな」

止める、止めてくれ、止めて。

それ以上を言わないで。

「私はずっと、花を持って会いに来てたのはな」

聞いてはいけない。きつと聞いてはいけないのに。もう。

「お前のこと、好き、だからだよ」

止めることも、耳を塞ぐこともできなかった。

正座して静かに微笑む太子を見る。

その膝の上で行儀良く握られた拳が、そして静かに語る声が、ほんの少しだけ震えていた。

だからもう、どうしようもないことだった。

卓に寄りかかった情けない姿勢のまま、わずかに上を向いて妹子は、嘆息するように目を閉じた。

「壊れ物注意報」

2010/11/09

「いいですから。あんたは近づかないください」

大回りで太子に近づき、呆けたままの手を引いて後ろに下がらせた。

あわてて見上げてきた顔がほんのり青ざめているみたいで、なんだちゃんと悪いことしたという自覚はあるのか、とそこに感心してしまった。太子はまずこの僕の評価を不名誉に思い、日頃の行動を改めるべきだ、ともつともらしいことを考えてみる。

僕は食器棚のかげからちりとりとほうきを取った。さつきまで太子のいた場所にかがみ込む。

ジュースでも飲もうとしてたんだろうな。オレンジ色の液体がこぼれて、小ささまさまの、湯呑みの欠片が散らばっていた。

手を切ってしまったわないう、気をつけて大きい物から順に拾ってちりとへ。

ジュースがこぼれているのが少し厄介だ。拭かないと後でべたべたするだろうし。もうできるだけ手で拾ってしまうか。幸いきれいに割れたらしくて拾いやすい。ほうきは使わなくていいや。あるかもしれない細かい欠片は、最後に雑巾でジュースごとふき取ってしまおう。

雑巾をかけてしまえば何も残らない。

ちりとりの中から音がしている。それは家の裏口にまとめておいて、後で捨てることにする。

珍しいことに太子はその間中、結局最後まで何も言わず大

ばん、と。
物の壊れる音はいつだって何だっただいてい心臓に悪いものだ。

びくん、と背筋が伸びた。
引き戸をはさんで向こうの部屋、台所を膝立ちでのぞき込める位置まで移動したら、放心した様子の太子が立ち尽くしていた。

「あーあ、もう」

読んでいた本を開いたまま机に伏せて台所に入った。

太子がなんだか途方に暮れた、泣きそうな、情けないかじで見てきた。

「あ、あのっ、こもっ」

人しかった。湯呑みを裏口において帰ってきてからようやく、太子が口を開いた。

「ごめんな」

「まあ、別にいいですよ。この湯呑みなら確か……………」

しよんぼりとうなだれる太子を後目に、食器棚を探す。ない。

下の段を開けてみたらそこに捜し物はあった。埃よけに軽く巻かれた布を取り去ってから、それを太子の手に持たせてやった。

「あ」

「ジュースですよ？ それ、使っていいですから」

言つて、僕は部屋に戻った。開きっぱなしの本の続きを読んでいたれば、とたとたと足音がする。

また転んで割るんじゃないぞ、と内心で思う。

「い、妹子」

「なんですか？」

両手でしっかりと、大切そうに湯呑みを抱えた太子が戸口のところに立っている。

何か言いたそうに唇を、開いたり結んだり、視線をうろろるさまよわせたりと忙しい。

なんですか、ともう一度促してやれば、申し訳なさそうに太子がうなだれた。

「これ、気に入ってる湯呑みだったんだらう？ ごめんな、割っちゃって」

……………はて、僕はそんなことを、太子に言ったことがあるだろうか。

たとえば本当に大事なものなら、脅しを入れつつ強く言い聞かせることはあった。

ただ太子の最初の訪問以来、僕の中でこいつは破壊神として認識されているため、ほんの少しあきらめている部分はある。多少のことでは腹は立たない。慣らされていると言えばそれまでだが、僕なりのこいつとの、つきあいを続けていくためのコツみたいなものだ。

それに湯呑みなんて、下手すると僕だつてたまに割る。そんなに、大切にしていた覚えもないのに。

「なんでそう、思うんですか？」

だから、そのまま聞いてみた。

すると太子の方こそ不思議そうに、ぼかんとした表情で言ってくる。

「だってもういつこ、買つとくくらい気に入つてたんだろ？
大事じゃないのか？」

まあそのおかげで、割っちゃったのに妹子あんまり怒つて
ないのかもしれないけどさ。

でもなんか申し訳なくって、と太子が。

……………ああ。

太子の勘違いに納得がいつて、なんだか気が抜けてしまつ
た。

太子がきよとんとしてる。僕が笑つた意味が分からな
かつたんだらう。

それは本当はただの自嘲だったんだけど、きっと太子には、
わからなかつたに違いない。

「いいんですよ。それは」

太子が手に持っているものは、割れてしまったものと全く
同じ湯呑みだった。

色も、形も、大きさも。

その意味を、説明しようとして止めた。

代わりにふ、と小さく、ため息といっしょに呟いた。

「ただの、大切になりそこねただけのものですから」

そしてそれ以上はもう、言つてやるつもりもなくなつてい
た。

夜寝る直前に皿洗いを忘れていたことに気づいた。

明日の朝でいいかと思いつつ、一度気がつくどと気になるも
ので、仕方なく。ジャマの袖をまくる。

水はひんやりと心地良かった。布で汚れをこすり、水で流
していく。

太子がジュースを飲んだ湯呑みもまだ洗つてなかつた。

水で流して、汚れがないか、確認がてらに眺めつつ、どう
してこれを買つたか思い返す。

大切でも何でもない。何の変哲もない、どこにでも売つて
いるただの湯呑みだ。

二つあるのは至極どうでもいい、下らない理由だ。

新しい湯呑みを買に行ったとき、そういえば僕の方だけ
ではなく、太子の必要かと思いついた。

何が気に入つたのか知らないが、しょっちゅう僕の家の上
がり込んでくる太子のためにそろそろ一つ、専用の湯呑みで
も用意してやつていいんじゃないかと。ふとそう思い立つた
のだ。

その日僕を買つた湯呑みは二つだ。

それが全く同じ湯呑みであると、気付いたのは家に帰って包みを解いてからだだった。

二つ並んだそろいの湯呑みを眺めて思わず呆然としてしまったのを思い出す。

これを、使うのか？ 太子と？ おそろいで？

……………そんなばかな。

ずっと使っている湯呑みはあった。そろそろ新しいのを買ってもいいんじゃないかって、そんな僕なりのささやかな贅沢だったはずだった。

そこになぜだか当たり前のように太子が入り込んでいるのが心底不思議で、思わず壁に頭でも打ちつけてやりたいような心地になった。

それで結局、二つ買って来たうちの一つは引き出しの奥にしまい込まれることになって。

一つは洗って棚にしまい、古い方を太子に使わせようと思つて。

結局、めざとい太子が新しい方がいいとごねたので、三回に一回くらいは新しい方を太子に使われることになったけれど。

「本当は、あんたのために買ってきたんですよ」

湯呑みの底から水滴が落ちる。

僕は一人でなに言ってるんだと、遅れて恥ずかしくなつて頭を抱えたくなる。

まあこれで、買ってきたかいいもあつたのかな。きつとまた太子が使うだろうし、僕は古いのがあるし。……………いやなんかそれは釈然としないけど。

まあ、いいか。なんて。

かなり適当に脳内をまとめて結論を出して、洗い物を片づけて布団に入った。

「じゃじゃーん！！」

底抜けにアホっぽくかつ明るく太子が騒ぎだした。

太子が突きつけてくるものを見て、ぼかん、としてしまつた。

「はあ……………」

「何だよおおもテンション低いな！ あげる、つつつてんのもつと喜べよ！」

「はあ……………はい、いやこれは……………ははあ……………」

「んもう、なんだよ、うれしくないのかよ。せつかく買ってきたつてのに……………はっ、さては妹子、その感動を表すために、爆発する準備をしているな……………。よしきた！ は

い！ さん、にー、いち！」

「しないよ！！」

むしろあなたが爆発しろ、という思いを込めてその空っぽ
そうな頭をひっぱっていた。なんか変な音したぞ。こいつ本当
に人間か？ それとも頭空っぽなのか？

「おいもがぶった……………」

なよなよと、気色の悪いポーズで太子が泣き始めるので放
置する。後でむなしくなって勝手に立ち直るだろう。

それよりもなによりも。

今渡された、この湯呑みだ。

「せつかく妹子のために探してきたのに……………また割つち
やっても大丈夫なんだから……………どうしてこの私の思い
やりに気付かないんだよ……………鬼だ鬼がいるここに……………
……………ううう……………」

「……………」

無視。

……………しきれないだろ。これは、この状況は。
どうしたって。

「……………そこで待っててくださいよ、もう」

台所に引っ込んで、ヤカンに水を入れて火にかけた。ちよ
うど二人分くらいのも、少ない量だったからすぐに沸くはず。

その間に、太子からもらった湯呑み軽く水洗いする。机の上
にもう一、棚から出した湯呑みものせる。

急須に茶葉を入れて、お湯が沸くのを待つ間に何か食べる
ものでもなかったかと探してみる。

待つてると言ったのに太子はこのことやってきて、机の
上の湯呑みを眺めていた。

「もう使っちゃうのか？ 予備じゃなくて？」

「……………ええ、まあ」

こういう時なんて言ったらいいんだろ。なんか、どう言っ
たって恥ずかしくなる気がして、説明する気にならない。

まあ、いいか。

なんて。

結論もでないまま問題は棚上げ。

今は何より、お茶菓子だ。

「私お饅頭がいいなー中に栗が入っているやつ」

「わがまま言うな」

そんな高そうな菓子こそ、食べたければ自分で買ってきて
ばい。

棚を探りながら横目でちらりとにらむと、太子はやたらと
ふぬけた顔をしていた。

ああもう、そんなに、うれしそうな顔をするなよ。

調子狂うだろ。本当に、もう。

「お湯まだかなー」

太子はそんなこと言つてやかんに手をかざす。

火傷するぞ、と言おうとする前に悲鳴を上げるものだから
ため息に混じって笑ってしまった。

「たおやかに
まろやかに
それは吹く」

2012/04/01

それよりも何よりも私の中で優先するのが、妹子という人だった。

「寒くなってきましたね」

「これからもっとだろ？ やんなっちゃうよな」

「冬は嫌いですか？」

「そうねえ……………」

なんて答えたものか、悩んだ。

悩んだ振りして黙っていた。

黙った後に鼻歌で、その返答を有耶無耶にした。

この時間を少しでも長引かせたくって私は、わりと必死だったのだと思う。

それは冬のある日だった。珍しいことに妹子の方から私を誘ったのだ。
散歩に出掛けませんか、と。
もちろん私は二つ返事で了解して部屋を飛び出した。すべての仕事をうつちやって。
だつてそうだろう。かわいい可愛い部下がおそらく勇気を振り絞って誘ってくれたのだ。

それを無下にしては上に立つ者としての沽券に係わる。

たまにはこういう形で部下の我儘に応じ、ねぎらうことも大切なのだ。

決して、けつして仏様に誓って仕事が嫌だったとかこれですぼれるじゃんやつたーとか、そういう思いはなかった。当然だ。

それに仕事なんていつでもできる。すぐに片づけられる。その気になれば。

このところ急激に気温が下がっていた。

ウール 100%だからいいとはいえ、やはり冬のしんしんと

骨まで沁み入るような寒さはあまり好まない。

許せるのは空の色くらいかと、首を後ろに倒して見上げていた。

冬の始まりを思わせる空気は薄い水色をしていた。まんべんなく氷の気配で塗り込めたような、さあつと淡く刷毛で掃いたようにどこか遠く灰色に霞む空の色だ。

切るような寒さの大気に、私の下手くそな鼻歌がたなびく。ざりざりとかたい地面を踏みしめて、途中で拾った枯れ木

の枝を振り回して私は進む。

目的も決めず、どこへとも考えず、思うがまま。

歌だつて気分をそのまま高低に直したような、でたらめな拍で遊ばせている。

私の立てる様々な音で紛らわしながら、私はしっかりと後ろからついてくる妹子の気配を聞いていた。

足音のない気配はずっと私の後ろを進む。となりに並ぼうとしない。前に先んじようともしない。

だから私は歌を歌う。

言葉のない音、意味のない符。

大気をもつと言えば私と妹子の間に漂うちよつとした緊張感を孕む空気を、誤魔化したい一心だった。

本当は薄々感づいている。

妹子が何もなしに私を誘うはずがないのだと。

用件が何かまでは悟れない。

だけどきつと何かが起こるはずで、妹子は起こすつもりで、起こるはずで。

その時を、少しでも先延ばしにしようという私の無駄な努力は続く。

あつけなく破られることまで悟ったまま。

「お話があります」

聞いてください、と君が言うから。

他でもない君が言うから。

本当は耳を塞いででも、拒絶したいくらいだったんだけど。同じかそれ以上の強さで、君を拒むことなんてしたくないと私は思っているから。

「なに？」

せめてもの抵抗に正面を向いたまま。

君のこと、見ないまま。

そう言つて足を止めたのだった。

実家に帰るのだと君は話す。

家の事情、都合、君の責務、仕事。

しがらみ。

私たちを引き離す、君を私から遠ざける様々なことを。

おもむろに開かれる君の口から語られるのは別れのための物語。

「そう」

と。

すべてを聞き終えたとき、私は言った。

沈黙を風がかき混ぜていた。

冷たい風だ。日暮れなのだ。どんどん冷える。

この先の冬の深まりを思わせるようにたちまち冷えて凍ってしまう。

そうしたらきっと私は動けなくなってしまう。

本当に妹子がいなくなってしまうたら、妹子の気配を私の内から消してしまつたら、私はひとり凍えたまま、きつと、動きだせなくなってしまうから。

「いいよ」

言った。

「信じてる」

主語のない思い。

「信じてるから」

前を向いたまま、せめて口の形だけは微笑みで。

信じている。

いつかまた会える二人の時間を。

どうでしょうねと混ぜつ返す妹子の声。

言葉の応酬。

目を閉じてなお笑う。

笑い飛ばす。

いいよ、と。

私は。

「いいよ、それで。妹子がそうしたいならそれで。妹子が必要ならそれでいい、全部、妹子の言う通りでいい」

だってきつと迎えに来てくれる。

思い、振り返ればもうそこには誰もいなかった。

やっぱりな、と私は笑う。

さようならはもつと上手に言うものだとも。

おそらく妹子が立っていたであろう場所だ。そこには赤いものが落ちていた。

歩み寄って拾い上げればそれは、大振りの花の頭だった。

どっしりとした花は外にいくほど濃い紅色の花弁を幾重にも重ね、中央には黄色の花芯を備えていた。

撫でれば指の先に花粉がついてゆるく香る。

なるほど、私の中の妹子の印象はこの香なのだと思ひ知ることになる。

唇をゆつくりと近づけて、冷たく僅か濡れているような花弁に押し当てた。

そのしつとりとやさしい感触を楽しんだ。

信じている。

「笑いあえる君との時間をまた。

忘れていない。
信じている。

それだけを使うことにずいぶんと長い時間を使い、鳥が鳴きだし日が昇り、部屋中白々とした明かりに満ちるまで同じ姿勢でぼうっとしていた。

私は布団の上にぼけつと座っていた。
今見たものをうまく整理しきれなかったのだと思う。

しばらく寝ぼけたまま、首を巡らせて薄暗い部屋のあちらこちらを眺めていた。

それにも飽きて、ようやく頭が理解し始める。

思い出にふけるなんてつまらない感傷だ。溺れている。そう思う。

だけで嫌いではないから、私は滑稽な動きでかくりと頭を落とした。

ふざけて、馬鹿にして、自分で自分を慰めながら馬鹿にするためだ。

大丈夫。

まだ大丈夫。

私はあきらめていない。

「こんこんと控えめに戸を叩く音に、なあにと聞けば食事ですと答えがあった。

そういえばそんな時間なのかもしれないがよくわからない。何せこの部屋は締め切りで外の動きに疎いのだ。このところずっと私のいる場所だった。こここのところ、がどれくらいの長さ重さを持つているのかさえもはや私は把握していない。

ただ毎食運ばれてくる食事と、たびたび訪れる使いの置いていくいくつかの案件が日々のすべてだ。

それ以外をたいていぼうっとすることに費やしていた。だって冬は寒いから。

お外は冷たいから。

そんなところにわざわざ出向く必要性を感じなくて、だつて仕事だつて、馬子さんの会話だつてこの部屋で住んでしまうのなら外に素敵なことなど何もなくて、ますます気持ちが悪えてしまつて。

その果てに、使いの者の声さえ妹子のもののように聞いてしまったとしても。

それだつてまあ、仕方ないかな、で済ませてしまつて。済ませてしまえて。

「いや、わかつた、いつもの通りそこに」

「馬子さまからの書簡が」

「それもそこに」

命じれば相手は従順だ。

その通り、私の望んだとおりに動いてくれた。

素直に従つて、すぐにいなくなつてくれた。

ちよつとだけ、長く息を吐く。

悪い癖。

ごっこ遊び。

あの日から問答のすべては妹子としている。

そんなことを妹子が知つたら、いったいどんな顔をするだろう？

想像してちよつと笑えた。

妹子の声を思い描く。

叱られる妄想によろやく、動きだせるような気がして立ち

上がった。

私には、ひとまず朝ごはんが待っている。

それ以外のことはもう、それ以外の時でいいや。

もくもくと口の中のものを噛み締めながら、妹子なら今の私になんて言ってくれるか考えていた。

不健康だとかなんとか、言つて叱ってくれるならやつぱりそれが良いように思える。

そしたら言うべき反論もすでに決めていた。

だつて君がいないから。

外に出る気にならないから。

仕事だつたらちゃんとやつてる。ここでこなせることばかりだ。仕方がない。それは私のせいじゃない。

ただ寒いだけなんだよ。

お外が寒いのがいけないんだ。

冬になるのが悪い。

それだけだよ。

それだけで、別に、他に特に理由はないよ。

「あんなに外歩きが好きだつたあんたが、ねえ……………」

放つておいてよ、私だつてそういう時があるんだよ。えと、センチメートルな……………」

「センチメンタル？」

そうそれ、それだよ！

でも、飛鳥時代なのになんでそんな言葉お前知つてんの？

「太子ですよそれ、教えてくれたの」

そうだったけ？

「そうですよ」

そうだったかなあ……………。

かたん、と箸をおいて息をのんだ。

ふと、気が付く。

妹子の声の誰かがまるで妹子の様な事を言っている。

焦りが浮かんで思わずむせかけた。

急いでお茶で喉を整えて、それでも咳込むように語りかける。

「あの、妹子、今日のごはんはカレー作ってよ」

このわがままに、妄想の妹子ならきつとこう言うだろう。

いいですよ、でもちゃんと全部残さず食べてくださいね。

でも本当の妹子なら。

私の優しくない妹子なら。

「やですよ。なんで僕がそんなこと、しなくっちゃいけない

んですか？」

部屋にこもりきりのあんに。

「どうせ作ったって部屋から出てこないんでしょう？」

泣きそうだ、と言うのは別に大げさじゃない。

泣いちゃいけないけど。

でもなんだろう、すごくむせそう。

目の頭の方、鼻のずっと奥の方。

そこがずうんと重たくなって痛くなった。

やだなって思って顔に力が入って強張る。

ごく、と飲み込んだ唾がいやに大きな音に聞こえた。

「行く、行くよ、絶対！ 妹子が作ってくれるんだったら」

「……………ねえ、ずっと、ずっとここにいたんですか？」

「……………うん」

「冬からずっと？」

「寒いのがやなんだよ」

「僕が誘ったら散歩に行つたくせに」

「妹子が誘ってくれたから出て行つたんだよ」

「そうじゃなくても、ブランドコ漕ぎに行くでしょう？」

仕事をさぼって

「だから、仕事はちゃんとやってたんだって」

くす、と笑う。

どうしようもなく見えてるものがぼやけそうで私は必死だ。

「そうですね、それは偉いです」

ねえ、太子、とやさしく呼んでくれる。

「知ってますか、もう」

春ですよ、と。

いつまでもそんなところに籠っていないで出ておいで。

ぶわ、と吹き込んだ風にとっさに目を覆っていた。

それは記憶の中、一番最近にぶつかった風とは全然違った。

やわらかい匂い。

あたたかい肌触り。

花の香り。

春の匂い。

お日様の。

嘘みたいにあっけなく開け放たれた戸のむこう、淡い若草色の裾を見た気がした。

やわらかく揺らぐ色が視界の端に引つかかっている。

籠りきった部屋の空気が一掃されて。

「だから臭いって言われるんだよ」

笑う声だ。

私はつんのめるように戸口に駆け寄る。

手をついて外に体を乗り出せば、目が合った。

戸口の下に、座り込んでこちらを見あげる人が嘘ではなくてちゃんと、いた。

これまで何度も思い描いた姿がそこに在る。

手をのぼしては掻き消えた嘘とはかけ離れた、圧倒的な存在感でそこに在る。

これは本物だと疑いなく信じられる。

腕をのぼして消える幻などではない。

そう、全神経が歓喜して私に伝えている。

「お久しぶりです」

それは困ったような顔だ。口の端が迷う様に歪んでいる。

目元がひくりとひきつって、それでも何とか、笑みに見えなくもない表情を作る。

不器用な顔だ。

大好きな人だ。

腹の底から湧いてくるようなよろこびを私は隠すことが出来ない。

第一隠すような必要もない。

理由もない。

だから満面に思いつきりの笑顔で私は叫ぶ。

「本当にな！」

ああどうしよう。

どうしたらいいんだろう、この、それこそお日様ひとつ飲み込んでしまったような強烈で鮮烈な感情の嵐。

春の絢爛に吹き荒れる花嵐のような、私から零れてしまいうようなほどのこの気持ち。

どんな手段でなら伝えられるだろうか。

どんな言葉でなら教えられるだろうか。

結局妙案は思いつかなくて、戸口に手を突いたまま体を乗り出して手を伸ばし、少しだけ強めに、妹子の肩を突いたのだった。

ちよつとだけ、責める気持ちの恨みを込めながら、何するんですかと声だけは怒って、でもやつぱり困ったような顔のままの妹子にひどくほっと安心しながら。

「おっそいよ、もう、だめかと思った」

「まだ季節が一つ回った巡っただけですよ」

「季節が一つ目減りしちゃったの！ 妹子と雪遊びしたかったのにダメだったじゃん」

「寒いのが嫌で外に出なかつたって言ってませんでした？」

「妹子といると暑くない？」

「そんな、人を熱血か何かのように言われても……」

お互いがお互い、文句を押し付け合つて戯れていた。

言葉の意味では悪態ついて、だけどじやれるように不満を遊ばせて。

ただ小さく指を繋いでみていた。

私も戸から転がり出て、着地がうまくいかなかったのを妹子に笑われて、拗ねたふりして、でも長続きしなくて笑つちやつて、妹子と並んで外にいた。

妹子は座り込んだまま。

私は隣に立つて壁に背を預けて。

ふ、と落ち着く沈黙はもう凍つたように固くなかつた。

そよと時折思い出したように吹く、春の風のようにまろやかにかぐわしくそれはある。

胸いっぱい吸い込めばきらめく想いが浮かんで膨らむ。たちまち体を内からとろかして、じわりと滲む想いを零し

そう。

息を吐く。

長く細く。

惜しむようにゆつくりと。

それは隣の妹子も同じ。

同じ間合いで肩が上下し、同じ呼吸を大気に混じらせる。

私も同じ。

妹子も同じ。

それだけがどうしようもなく体に春を運んでくる。

ずっと、言いたいことがあるんだ。

「おかえり！」

きつと君は笑って答えてくれるだろう。

「ただいま」

やさしくやわらかく。

春に緑の芽吹くように。

花の弁の綻ぶように、やさしくやわくたおやかに。

色づく想いを宿らせて。